

葬送習俗についての調査報告

成 田 俊 治

葬式といえは常識的には人が死んでからその死體を處理する爲の儀式であり、その儀式は僧侶によつて執行されていると考えられている。確に僧侶は人がこの世を去ると同時に、枕經・葬儀・野邊送り・中陰法事と葬送に重要な位置を占めている。それと同時に葬式が人として最後に通過しなければならない儀式、嚴密にはこの世を去つた人を取りまく周圍の人々によつて通過させられる儀式である以上、血縁・地縁の人々による協力の大きなことを認めねばならない。むしろ葬式は地縁的關係の人々によつて執行され、僧侶は死者を彼岸へ送ると云う重要な役目を負つてはいるが、葬式全般の執行には關與していないのである。この意味に於て葬式は社會現象として把握する必要がある。

所で、死者の魂を彼岸に送ることが葬式であると一般に考えられ、死者が十萬億土へ旅立ちする出發點であるとする考え方は、全く佛教的な考え方と云わねばならない。成程、現在各地に見られる葬送習俗には、旅立ちを物語る幾多の習俗を見ることが出来る。だからと云つてこの事が古くから行われ、しかも不變のものであつたと考えるのは當を得ていない。何故ならば、佛教の考え方が入つて來てから十萬億土への旅立ちと云われ、又葬式もその旅

立ちを示すようになったからである。葬送習俗の中には、佛教の教理で以て理解し得ない面が少くない。それは日本人の個々の信仰の上に、ものの考え方の上に佛教の思想が融合して形成され定着して來たからであり、佛教的な色彩をもち、又佛教的解釋をなされ乍ら、それでは理解し得ない要素を含んでいるのである。それは何か、又本來の様な意味をもっているか、と云うことを考える所にこの葬送習俗の調査を試みた意圖がある。

この調査報告は、昭和三十八年・昭和三十九年の夏期に行つたものであり、Iは、埼玉縣下八ヶ所（縣廳保存の民俗調査による）。IIは、佛教大學生有志四十五名の協力により、調査項目四十二項に従つて調査したものである。

I ①埼玉縣秩父郡吉田町大字下吉田

② 〃 秩父市品澤

③ 〃 北葛飾郡杉戸町

④ 〃 浦和市大久保領家

⑤ 〃 比企郡川島村大字上八ツ林

⑥ 〃 川越市杉下

⑦ 〃 北葛飾郡三郷村大字幸房二九三

⑧ 〃 北埼玉郡北川邊村大字飯積

一、呼び方

（以下報告は番號で示す）

① ゴフコウ、トムレエ。

② トモライ、オシマイ。

④ トモライ。

⑧ ジャンボン。

このジャンボンは葬具の音から出ているもので、子供の言葉を陰語のように採用したものであらうと云われている。

二、死の前後

人間が死ぬと魂が肉體から遊離すると考えられて「魂呼び」が行われるのであるが、ここでは魂呼びの形は見ることが出来なかつたが、肉體からぬけ出た魂の行方について、

⑧ 善光寺へ行くと云われている。

(A) 湯灌

① しない。

② 肉親者の手によつて行われ、酒を含んで吹きつけるという形式をとっている。

③ 湯灌の湯は、釜のふたをとつて沸かし、次に湯灌をする部屋のタタミ、床板をはずして、そこに竹のすだレを敷き、その上に死者を裸にして坐らせ手桶に湯をくんで半分に切つた手拭で洗う。洗う人が多い程後生がよいと云い、洗う人は禪一つであり、良く洗わないと浮ばれないと云っている。又死者と縁の遠い人は杓子で死者の頭に湯をかけた。終ると「まくり出し」と云つて死者の下着や湯灌に用いた手拭をすだレにくる

み、焼場へ持つて行き藁五束と一緒に焼く。

- ④ 鍋のつるに竹竿を通して沸し、洗湯は水の中に湯を加える“逆さ水”で、タタミをはぎ、タライを伏せてその上に死人をかけさせて洗う。濟んだ湯は陽のあたらない山陰に捨てる。湯灌を行うのは近親者で湯灌に先立ち裸のまま“入棺酒”を飲む。この酒は残すものでないとされている。湯灌が終つて再び“清め酒”を飲み食事をとる。この湯灌には妊婦や妊婦のある夫は遠慮することになっている。

- ⑥ 子供や親類の人が手拭を半分に切つたものでふき、この時使つた水は仙波裏の捨場に捨てるとう。

- ⑦ 湯灌した湯は屋敷内に穴を掘つて流す。

- ⑧ 湯灌した湯は、流行病死者、死馬を焼く所（焼場）へ、そのままの服装で捨てに行く。

(B) 枕團子・枕飯

- ② 枕團子・枕飯を作るのに日常使用している“かまど”は使用せず別に作るになつてをり、枕團子は六個作る。枕飯については“デバのめし”と云う一杯飯を作る。

- ③ 枕團子の作り方として茶碗一杯の玄米を石臼で粉にしてそれを三個に分けて作る。特に供えた團子を食べると子供は百日咳にかからぬと云い、又年寄りが亡くなつた際の團子は尚よいと云う。

- ④ 近隣の者が玄米を粉にして團子を四個作る。

- ⑤ 俵の形をしたものを三個、近隣の人は平たい團子四十九個、又三十六個の大きな團子は六個づつ串にさして供える。

(C) 入棺

① 近親者全部で行う。

② 近親者で行い、死者は北枕にし顔には手拭を一重にかける。着物は右前とし足袋は反対にはかせる。そして死者の布團の上に魔除けの刃物をのせる。

④ 北枕に寝かせ刃物を死者の上や棺の上に置く。衣裳は經帷子、手甲、脚胖、足袋、頭陀袋、副葬品として五穀、桑の木の杖、六道銭、其他特に死者の使用したものを入れる。

⑦ 入棺後全員で飲食する。

(D) 通夜

① なし

② 親類・懇意の人々によつて行う。

④ 家族のみ。

三、葬儀

(A) 葬式組

① 死亡の通知は“人に行く”と云い二人で行くのが原則とされている。諸役として一、穴掘り、二、帳場、

三、ザハイ（座ハイ＝念佛頭）と云う役である。

② 葬儀一切のことについて喪主は近隣の組にまかすことになっている。諸役は一、穴掘り、二、親籍使い、

三、まかないに當る人、四、火葬場に行く人、五、醫者に行く人、六、寺へ行く人、などで寺へ行く人は原則として二人で特に“人に行く”と云い、寺へは旅米一袋を持参する。七、役場に行く人、などである。特

にここでは旅米を持つていくことになつてをり、死者は長い旅に出るからだと言ふ。

- ③ 部落二十六戸から一人づつ葬式に立合い、當日の帳場は二人で、預る人は當地の地主と云われる人が決まつている。其他近所四・五軒は一軒から男女二名出て葬具の準備、使いなど手傳い、婦女子は炊事を手傳う。
- ④ 五軒組と云うのがあり、その長が葬式の一切の指揮をとることになつている。五軒組員は喪家の家族にかわつて、通知・葬具の用意・穴掘りに従事する。通知には必ず二人で行くことになつている。又穴掘りのことを“トコトリ”と云う。特にここでは組の相互扶助として“無縁錢”と“クヤミ”とがある。“無縁錢”と云うのは、葬具購入費を想定して村の戸數で割つた程の額を葬式の日に集めて喪家に渡す。これを集めるのは前に葬式を出した家が集めることになつている。又“クヤミ”は五軒組のものが、米・味噌等を喪家に持參する。クヤミ返しは餅で返される。(このことは戦時中から行われなくなつたようである。)

- ⑤ 講中二十六名が順番で手傳うことになつてをり、棺をかつぐ人を“肩屋”と云い四人である。又穴掘りを“大役サマ”と呼んでいる。

- ⑥ 部落中が三組に分れてをり、死者が出た組が手傳い、又死者が出ると紙に書いて部落内をふれ回る。

- ⑦ 組は十九戸であり、その中より穴掘り役四人が出る。

- ⑧ 親類に通知する人が二名一組、葬具用意二名、穴掘り四名で穴掘りの人を“大役”と呼んでいる。

(B) 出立ち・野邊送り

- ② 葬列の順序は、ハタ——位牌(主人)——膳(嫁)——棺——花——會葬者の順である。

- ③ 縁より出て庭先を三度回る。その際、位牌に被せてある袋をとられると後生がよいと云い、又袋を取つた

人はこれで小物を作り、これを身につけていると長生きすると云われている。布地は羽二重・綸子など上物を使う。葬列はハタ——位牌（相續者）——膳——棺——近親者の順である。

- ④ まず軒に割竹をさす。これは當地では魔除けの爲としている。庭には「ハヤ」と云つて竹を四本たてて、まわりに「さらさ」を張つた圍を作る。入口には門牌（門札）として六地藏棚をたてる。棺には天蓋をかけ、四本の幢と小天蓋一本を作る。近親者には金剛杖と云われる竹を割つたものを渡す。更に棺が出る前に「汁かけめし」を一本箸で食う眞似をする。縁から出た棺は庭を左に三回廻り竹の「ハヤ」の中に安置され僧侶による引導が渡される。ここでは外葬禮（庭葬禮）を行つてから墓地へ行つて墓葬禮を行う。葬列は白高張提燈——花——位牌——膳——棺（まわりに幢もち）——近親者——會葬者の順で、以前は放鳥・投錢があつた。喪主は紋付・袴、女子は白衣白帯、以前は綿ボーンシをかぶつたと云う。

- ⑥ 葬列は、高張提燈——位牌——膳（白を着た人）——棺の順で、特に死者が老人であれば位牌袋を多く作り道中に捨て乍ら行く。これをひろつて何かに作りかえて身に付けると後生がよいと傳えている。

(C) 墓地

- ① 埋葬した場所に石を置き割竹をさす。

- ② 小石を投げ込む。

- ③ 埋葬した上で麥藁を焼く。（一束ワラ）

(D) 式の後

- ④ 野邊送りから歸つて來ると庭先のタライで足を洗い、鹽をふりかけて清める。その後飲食する。

- ⑤ 式後家族の者が死者の着物を日陰に北向きにかけ、これに水をかける。これは願解きの爲と云う。（願もどし）

- ⑥ 親類から三百個、親元から四百個持つて來た餅を香奠返しにする。

四、以後のこと。

(A) 忌明け

- ① 翌日忌明けを行う。

- ② “ダンバライ”と云つて七日目に忌明けをし、この日に死者の形見分けを行う。“ダンバライ”は新佛の壇を拂うことを云う。

- ③ 四十九日間が忌中で七日目毎に墓參し、忌日塔婆を一枚ずつはがして來る。特に三十五日には親類、四十日目は子供達が集つて墓參する。

- ④ 四十九日間忌中で、忌明けの時に“死拂い”と云つて餅をくばることになっている。

- ⑤ 翌日に忌中拂いをする。四十九日、百日（カンチと云う）に墓參する。墓參の時に白團子供えるのであるが、それを食べると風邪にかからないと云う。

(B) 年忌

- ① 一、三、七、十三、十七、二十三、二十七、三十三回忌までつとめる。

- ② 最終年忌は三十三回忌まででその時には杉の木の花のあるものを使つて“トメトバー”を作る。

- ③、⑦ 十三回忌までである。

- ④、⑧ 三十三回忌までつとめる。

(C) 墓碑

- ① 早くて三回忌、遅くても十三回忌にたてる。
② 七回忌にたてると石が倒れると云い、大體十三回忌にたてる。
⑧ 三回忌乃至七回忌にたてる。

II 調査項目による報告

- ① 青森縣西津輕郡鰺ヶ澤町・古川泰然
② 福岡縣大牟田市天領町三丁目三三・甲斐田定純
③ 奈良縣大和郡山市山田町八三四・前川泰嶺
④ 愛知縣稻澤市南麻績町一九・村下順一郎
⑤ 長野市西町一〇二〇・吉岡孝善
⑥ 滋賀縣神崎郡五個莊町小幡・小川達之
⑦ 香川縣仲多度郡滿濃町羽間部落・瀧口信行
⑧ 福岡縣直方市大字植木・松尾正典
⑨ 愛媛縣北宇和郡津島町横浦・井上正文
⑩ 〃 南宇和郡西海町中泊・吉田弘定

葬送習俗についての調査報告

- ⑪ 山口縣都濃郡南陽町富田新町中・小田和信
- ⑫ 兵庫縣尼崎市東富松字宮東・片岡秀晃
- ⑬ 京都府加佐郡大江町河守清水・古寺忠夫
- ⑭ 大阪市天王寺區逢坂上ノ町・前坂良昭
- ⑮ 滋賀縣大津市石山寺邊町四七・吉水邦應
- ⑯ 滋賀縣八日市市邊町・平松康圓
- ⑰ 和歌山縣日高郡南部川村清川・石井清澄
- ⑱ 佐賀縣東松浦郡呼子町一九八七・華頂孝俊
- ⑲ 長崎縣大村市武部郷・江島廣道
- ⑳ 佐賀縣鳥栖市田代上町二四二・梁井信壽
- ㉑ 大分縣東國東郡安岐町下山口・中野照純
- ㉒ 奈良縣大和郡山市新木町・清原信彰
- ㉓ 三重縣阿山郡阿山村波敷野・柴田正雄
- ㉔ 奈良縣天理市和爾・竹田元昭
- ㉕ 大阪府枚方市大字田口・井上孝雄
- ㉖ 大阪府箕面市大字粟生問答・富永謙司
- ㉗ 兵庫縣揖保郡御津町室津一六八・大林敬正

- ②8 福岡縣三井郡小郡町大字小郡・山下義敬
- ②9 佐賀市多布施町西大島一九七・柴田勝比古
- ③0 廣島縣佐伯郡甘日市町幸町・中野宏道
- ③1 福井縣武生市文室町・堀立暎
- ③2 京都市上京區鍋町相合ノ圖子・小山清昭
- ③3 滋賀縣八日市市濱野町二〇六・二橋定順
- ③4 奈良縣磯城郡三宅村屏風・藤田能宏
- ③5 奈良縣吉野郡吉野町左曾五〇・伊藤義範
- ③6 兵庫縣芦屋市西山町・曾和保雄

(以下報告は番號で示す)

○生死の境

1 「葬式のことを何と云うか。(例えば茶毗など) 童語・隱語があれば聞くこと」

- ① “葬式” “ダミコ” と云う。“ダミコ” に二つの意味がある様である。本來は“ダミ” と云つて葬列を意味しているが、ここではこの他に“死者” を意味している。即ち〇〇が死んだと云う場合“〇〇でダミコが出た” と云つてゐる。

② おとむらい。

③ 野邊

④ 葬れん

⑤ “ダメ” “ダメ”と云うが今日ではあまり云わない。

⑥ 葬れん、おとむらい。

⑦ 葬れん

⑧ 野邊おくり、しまい、おとむらい。

⑨ “送り”と云われているのが一般的である。又隠語として“ハツがころんだ”と云う人もある。

⑩ “でだち”と云うのがある。

2 「死の豫兆とか生れ替る話はないか」

① 死の豫兆について、カラスが屋根又は樹上に止まり北を向いて三度續けて鳴くと、その家又は親類に不幸があると云われている。又それは“カラスが枕団子が欲しくなれば飛んで来る”とも云われている。

④ カラスが鳴くと近いうちに死者が出ると云う。

⑪ カラスが家の上で鳴くことを死人が出ると云つて嫌う。

⑫ カラスが屋根の上を廻るとその家に死人が出ると云つて嫌う。

3 「死後すぐ死者の靈がどこかへ行つてくる」と云う傳承はないか

⑦ 死後すぐ善光寺へ詣つてくると云う。

⑧ 善光寺へ行くと傳えられている。

⑬ 死人に供える御飯（枕飯）がたき上るまでに善光寺に詣つてくると云う。

⑭ 善光寺へ参ると云う。

⑮ 岩間寺へ行くと云われている。

⑯ 善光寺へ詣りに行くと云うが、これは善光寺へ詣つたことのない人が死んだ場合である。生前善光寺へ詣つたことのない人は四十九日から一周忌の間に肉身の人が位牌を持つて善光寺へ詣る。

4 「ネズミ・猫などが出たりするのを特に嫌うことはないか」

① 猫の出るのを嫌う。猫が死者の側に行くと死者が踊り出すと云う。こうした傳承は一般的で、死者の魂が身體から遊離した後へ、無縁の魂、畜生の魂が入り込んで困るということであろう。

⑥ ⑩ カミナリになるのを嫌う。死人を取つて行くと云われている。

⑰ 四つ足特に猫などの魔性のものが死者に近寄ることを嫌う。

5 「灯の急に消えたりすることを特に忌むことはないか」

① 通夜・葬式には電燈は使用しない。それはローソクの火を見る爲である。即ちそのローソクの火が急に消えると魂が地獄に行つたと云い、又火が二つに分れると地獄と極樂の別れ道で迷つていと云う。このことがない場合は極樂往生と云われる。

⑧ 讀經中、灯のまたたきを精靈の喜びとの云い傳えがある。

6 「葬式の日取りについて特に忌むことがあるか」

葬式の日取りは友引の日を避けるのは一般的である。

① 佛滅・友引・丑の日を忌む。佛滅の日について特別に云われていないが、友引の日に行くと年内に肉身の者

が三人死ぬと云う。止むを得ず行う場合は人形二つを入れて身代りとする。又丑の日については牛の尾によつて生天するからいけないと云われている。

② 友引き、丑の日。

③⑬ 友引き、卯の日を忌む。不幸が重なると云う。

⑤ 友引き・寅の日は避ける。止むを得ぬ時は人形を一緒にに入れて身代りにする。寅の日を忌むのは「虎は千里行つて千里帰る」という諺からだと云う。

⑦ 友引の日。但し上友引の日に葬式を出すと目上の人が亡くなると云い（死んだ人より目上の人がない場合には出す）、下友引の日に葬式を出すと目下の人が亡くなると云う（死んだ人より目下の人がない場合は出す）。

⑨⑭ 友引き・寅の日。

⑬ 友引きの日。この日に止むを得ず行う場合は夕方にする。この時棺の中にコケシ人形を入れる。

⑦ 「葬式が行われる前後などに使つてはならない様な言葉があるか。」

① 結婚とか出産・妊娠・繁榮等めでたい言葉が禁ぜられており、不意に出た場合は死者の靈前に香をたいて許を乞うと云う。

⑭ 死者を侮る言葉及びめでたい言葉。

⑧ 「魂呼び（臨終或は死後直ちにその人の名を呼びかえして蘇らせようとする習俗）ということが行われているか。あれば誰が・何人で・何処で（例えば枕もと・屋根又は高い所へ登る・山・海・井戸などに向つて）。手にもつもの。」

⑤ 枕もとで呼ぶが、老人に對しては行わない。

⑬ 親族のものが枕もとで死者の名を一度ずつ呼ぶ。又は代表者が三回呼ぶ場合もある。

9 「火ガカリ・火ヲカブル・火ガハリと云うことがあるか。あればその日數。及び喪家の標識について。」

① 死者の出た家庭の人達から火・マツチ、或はタバコの火をもらうことを嫌い、もし借りると不幸が來ると云われている。又死者の出た家庭と、妊産婦のいる家庭との關係では、喪中の家族員が妊産婦のいる家へ行くと必ず火事が起ると云い行くことは出来ないことになっている。どうしても行かねばならない時は窓越しに會話をする様にしてゐる。又妊産婦が喪中の家を訪問しなければならぬ時は、前以て妊産婦以外の家族員を使者に出して妊産婦が訪問する旨を伝える。喪中の家では使者が來た時に家にある火の全てに鹽を投げて喪火でないことを表現して妊産婦の訪問を待つことになっている。用件が済み妊産婦が歸ると再び火に鹽を投げて喪火にもどすことが行われている。今一つ妊産婦がゐる家庭に死者が出た場合、他の喪家との交際は自由であるが、しかし妊産婦家庭の葬式の日より二十一日以内に起つた時に限定されている。

靈前に供える物を煮る場合は必ず火を別にする。忌中は二十一日間乃至四十九日間である。喪家の標識は竹のすだれに半紙三分の一に「忌中」と書いて忌明けまで下げておく。

⑤ 家の神を封じ、五十日間は神社の鳥居はくぐらず一切神社から遠ざかる。

⑦ 葬式を出す迄は喪家の人は食事のことを一切しないで他人にしてみらう。

⑩ 火ガカリは四十九日までである。

⑬ 火ガカリは四十九日間で、神社の仕事には一切出ない。

②0 中陰期間を火ガカリと云つて神社の鳥居はくぐらない。

10 「死人と同齡の人に關し何か特別な習俗があるか」

⑨ 同齡の人は葬式の時おともにつかない。又妻が妊婦であればその夫はおともにつかない。

⑲ 親族内の同齡の人は葬式の日より三日乃至七日間はその家に宿して靈前の供養を食べることがある。

11 「死亡と村民の生活制限について」なし

12 「枕團子・枕飯を作るか」

① 枕團子・枕飯共に作る。枕團子は二種類作り、一は直徑二糎程のもの、他は直徑四糎のアン入りのもの。枕團子は最下段を七つとして三角形にして積み重ねて行く。枕飯は死亡するとすぐ作り、山盛りにし箸は必ず十

文字にさす。

⑥ 枕團子は四個作る。

⑧ 枕團子は死後速かに作り供える。

⑨ 兩方又は一方を作るが、枕團子を作る場合は米を水洗いせずして作られる。

⑯ 死後直ちに枕團子を作り供えることになっている。

⑰ 兩方作るが、枕飯は茶碗に高く盛り一本の箸をたてる。

13 「死者の寝かせ方、體を縛つたりしないか。着せる着物・魔よけなどについて」

① 北枕に寝かせる。着物は死者が生前中最も好んだ着物を着せる。納棺の時は白装束である。尚この項には直接關係はないが、出棺後死者の寝ていた部屋の四隅に“アトフダ”をはりつける。これは神社發行のものもある。

るが僧が書く場合もある。即ち「東方・神力演大光」「西方・普照無際土」「南方・消除三垢冥」「北方・廣濟衆厄難」と無量壽經の四誓偈の文を書いて貼る。

⑩ 西向き、死後すぐ“むしろ”に寝かす。

⑪ 死者が出ると、その死者の身につけていたものを洗い屋根の上に目につく場所に干す。

尚、頭北面西、枕元に刀剣を置くのは殆んど共通している。

14 「棺に入れる前に死人を湯で洗うか。その場合の湯の加減は冷水に湯を注ぐか。入棺の時の死者の服装及び副葬品、頭陀袋の作り方と入れるもの」

① 湯灌は冷水に湯を注ぐ、“逆さ水”であり、以前は湯灌の時に全身の毛を剃つたが、現在では頭毛を剃る。

全身の毛を剃つた時には、カミソリを使う人と、大根を持つ人（これはカミソリの油を取る爲に使用する）、及び線香を持つ人、ローソクを持つ人の四人であつた。

死者の服装は“逆帽子”（逆頭巾）をかぶせ、經帷子・脚絆・テヲ（手甲のこと）・ワラジで、ワラジの緒に六文錢をつける。

副葬品は“ツイ”杖のことで、生の細い木を二尺五寸程に切り上方の握る方に半紙を巻きつける。

頭陀袋の中に入れるものとしては、親族や縁の濃い人の爪や頭毛・六文錢・又死者が特に愛用したものを入れ、六文錢は生前惡業を爲した——所謂罪が深い人程多く入れることが習慣になつている。頭陀袋の作り方は二種あり、一は袈裟の様になつて中が袋になつたもの、一つは腹にしばらくつける様に作つたものの二つである。經帷子やこうしたものを作るには、ハサミとか物指は使用せず畳の三尺を利用して寸法をとつていく。縫う時も

縫糸の玉は作らない。

- ③ 死人を湯で洗うが、その湯は冷水に湯を加える。頭陀袋は前につる様に作る。入れる物は死者の好きなもの、一文錢三枚。又鎌の先を入れる。

- ⑤ 死者の服装は經帷子・手甲・脚絆・白念珠・袈裟・ゾーリ（ゾーリは死者が再び歸つて來ない様にと緒を切つておく）をつけ、杖・善光寺から血脈・六文錢・香等を入れる。

- ⑦ 手甲・脚絆・足袋をはかせこよりでくる。ここでは頭陀袋のことを“サンヤ袋”と云つてゐる。

- ⑨ 湯灌した人は葬送のおともにつかないことになつてゐる。

- ⑩ 湯灌は水でする。空のタライに入れてかけ水をする。服装は經帷子・袈裟をかけ、又頭陀袋には六文錢・ハシカチを入れ、菓子・枕團子・辨當なども棺に入れる。

- ⑭ 入棺の時の服装は經帷子でその背には六字名號・觀音・勢至を兩脇に書く。手甲・脚絆。頭陀袋には法名及び血脈譜・六圓・及び笠・杖を入れる。

- ⑰ 湯灌は冷水に湯を入れる。又頭髮を剃る。副葬品は死者の愛用の品や、杖・花等を入れる。頭陀袋は威儀細形にひもをつけて「入一法句」と書く。

○葬式

- 15 「講或は葬式組と云われるものが手傳うか。講・葬式組の範圍、諸役の分擔、（幼兒・未婚者・戸主等との差異）」

- ① 講は特別にないが、村の戸主が全員手傳い葬式を執行する。尚村内五十歳以上の婦人によつて結成されてゐる念佛講・觀音講などの講中の人々が、野邊送りの時稱名して行列する。

④ 四十數戸を東・西・南の三組に分けており、組に屬する戸主のみが手傳う。役の分擔はその時話合ひの上で決められる。

⑨ 村内各部落に念佛講があり、これが葬式組となっている。

⑩ 部落を數班に分けており、その組下のものが葬式一切を手傳う。以前は米を出し合つた。

⑬ 葬式組があり、幼兒死亡の場合は一組だけが手傳う。未婚者の場合は二組が手傳い、戸主の場合は三組が手傳う。そして能方・炊事・寺院係・一般會葬者係等を組々で手傳う。

⑰ 部落單位で葬式組があり、穴掘りは輪番制である。

⑳ 組内は無常講金として一人一圓を集め喪家へ供え、葬式の世話は組内で行う。

㉑ 無常組があり式の準備一切をする。親族の人々は臺所を手傳つてはならないことになっている。

㉒ ニ講があり通夜及び死者に着せる着物並に供え物等を世話する。

㉓ 一村が上下組に分かれており、又上下組を數班に分けて手傳い諸役を分擔する。

㉔ 垣内の人々、又親族の人々が手傳う。

㉕ 冠婚葬祭にたずさわる組があり、これは“丁(チョウ)”と呼ばれるもので、八乃至十軒で成り立つてゐる。

16 「葬具と種類・調製(一回ごとのものと連用のもの、連用のものの保管場所)。棺の形」

① 葬具は、造花三對(白・金・銀蓮華)、シカの花(四花)、タイマツ——以上は新調し、棺臺は連用で墓地の小屋に保管してある。棺の形は寝棺と櫛式兩方あるが、村に於ては櫛式のものが多い。

③ 葬具は、ハタ・燈籠・ナガエ(棺を乗せる臺)・花立て・トウキン等で・棺の形は寝棺・座棺(丸・角の二

種)である。

- ④ 提灯・ハタ・華籠・銘旗・闕伽が一回きりのもので、輿は連用で各部落毎に有している。寝棺が主である。
- ⑦ 葬具の保管場所は“サンマイ”(焼場)である。棺の形は丸い棺桶である。
- ⑦ ローソク立て・焼香臺・生花筒・杖・六道灯・引導用鍬・ハタ等は一回きりで、人天蓋・燈籠・棺掛袈裟等は連用で寺に保管する。棺は底が四角の立方體のものを用いる。

17 「棺の出口、出棺の時の作法」

- ① 棺の出口は村家の多くは“シトメ”がありそこが出口となる。普通の時にシトメから出入すると早死すると云われている。出棺の時の作法は、最後の別れをして、死者の血縁のものが棺に“麻糸”をつけて出口まで引いて行く。喪主が一人で糸を持つている間に他の者は外に廻り再び糸をとつて庭まで引いて行く。その場合一旦糸を握れば離してはならないことになっており、離せば親族の縁を切ると云われている。(縁の綱・善の綱)
- ⑤ 普通は玄關以外の縁から近親者によつて運び出し、棺が安置してあつた部屋に鹽をまいて清める。
- ⑥ 茶碗をわり、半分程燃した藁の上を棺を擔いで跨いで行く。
- ⑦ 縁先から出て、出棺の時に親類一同に冷酒を出す。
- ⑬ 出棺の時藁をたき、タライで伏せる。
- ⑭ 後向きに出る。
- ⑮ 玄關で門火をたき、死者の茶碗をわる。
- ⑰ 座敷表口より出棺。

①9 棺の出口は縁側であり、出棺の時は竹の門を作りその門から出る。

②1 必ず縁から出る。又疊の上からゾーリをはいて出る。

②7 出棺の時死人の使用した茶碗をわる。

②8 玄關から出てその前で三回まわり、茶碗をわる。

18 「野邊送りの行列の順序及び役目を擔う人。（棺を擔ぐ人、位牌、タイマツ、ハタ、花など持つ人） 〓死者との關係」

① 棺を擔ぐ人は死者と親しくしていた人であり、位牌は相續人、タイマツは兄弟又は死者の子供で、ハタ・花等は特別に決つていない。葬列は、花——燈籠——白蓮華——銀蓮華——金蓮華——燈籠——盛物——菓子果物——團子——野飯——膳——燭台——香爐——四花——位牌——女性——棺（網を引く）……と續くが、僧侶は葬列に加わらず先に墓地へ行つてゐる。

③ カドビ（手持……門口の中で火をつけてすぐ外で消す）——標目（手傳い）——鐘（講員）——色旗（親族關係）——如來さん（傳法を受けた人）——役僧——導師——白旗（親族關係）——白燈籠（親族關係）——花（手傳い）——線香（手傳い）——位牌（相續人の妻）——棺（子又は親族關係四人で擔ぐ）——天蓋（親族姉婿）——親族一同——手傳い及び村人の順。

⑥ タイマツ（子供）——盛物（隣組）——僧——三具足（隣組）——旗（子供）——膳（二男）——位牌（長兄）——棺（親族一同）——塔婆（親族）——會葬者の順。

⑦ 位牌持ちは相續人、棺を擔ぐ人及び天蓋は身内の者。

葬送習俗についての調査報告

⑨ 位牌は相續人。他は部落の人。身近な者は行列の一番後につく。

⑬ 二十五菩薩（組の長老）——タイマツ（濃い親族）——ハタ（組人）——生花（友人・遠い親族）——線香（友人・親族）——盛物（從兄弟）——香爐（妻の兄）——鶴龜（從兄弟）——四花（分家）——位牌（相續人）——供

膳（長女）——燈籠（從兄弟）——棺（子供・從兄弟）——天蓋（姉婿）——杖笠（子供）の順。

⑰ 棺を擔ぐ人は近親者が交替で擔ぐ。出棺の時は相續人と最も近い親族で擔ぐ。位牌持ちは相續人、タイマツ

は子供、膳・ローソク立て・焼香臺・枕團子・諸生花・花環・ハタ・燈籠等順次近親者より葬式組員が受持つ。

⑳ 野邊送りの行列の指示は無常組の組長が決める。但し位牌は相續人の妻が持ち、綿ボロシをかぶる。

㉑ 花輪——先燈籠——飯持（相續人の妻）——位牌（孫）——四本旗（近親者）——客僧——役僧——導師——ゼ

ンノ網（近親者婦人）——前棺持（死者出生家の主人）——後棺持（相續人）——後燈籠（近親者）——天蓋——一般會葬者の順。

㉒ 野邊送りの途中、タイマツ（竹を割つたものに大根の丸切りをさし、その上にトーガラシ・ローソクを立てる。そして竹に白い紙を巻きつける）を道の角々に立てて行く。

㉓ 十年程前まで竹を割りそこにローソクを立てたものを、自宅から墓までの曲り角に一對ずつこれを立てた。
19 「墓で棺を廻したり、墓穴に納めて小石などを投げるか。又埋葬品があるか」

① 墓地では小屋の前に墓穴の土を山盛りにしてこれを中心にして左へ三回廻る。墓までの途中では別にこれといったことはないが、道の曲り角、橋の上に来ると鉦を鳴らす。途中橋の上を通つた時は、棺を擔いでいる人は注意して「棺が重く感じた」「軽く感じた」等の感じ方を喪主には云わず後に村人と話し合うことがある。重く

感じた場合は不歡喜の死、軽く感じた場合は歡喜の死であり、何も感じなかった場合は老人に多く、宿命の死とされている。

⑫ 死者の家族が始め少し土をかける。

⑬ 長男か、死者と一番濃い人が土をかける。

⑭ 墓にある蓮臺の上で、五重・授戒を受けていない人は左より三回廻り、受けている人は廻さない。又身近な人より一握りずつ土を入れる。

⑮ 墓地では左から棺を三回廻す。納めたら相續人、近親者が一鍬ずつ土をかける。

⑯ 墓で左より三回廻り、近親者は一鍬ずつ土をかける。

⑰ 棺を擔ぐ人はワラジを墓の中に入れ何も持つて歸らない。

20 「墓地で役目を擔つた人々が飲食するか」

① 墓地での飲食は、墓穴を掘つた人に限る。穴を掘つた人は死者と最も親しかった人を加え三人で掘る。その場合死者が生前穴掘りを友人に依頼してあれば、依頼された人が掘ることになる。この地方では村内の親しい知人に依頼しておくことが普通の様で、依頼を受けた人は最後までそれを秘密にし、出棺前に喪主に申出るのである。もしなければ喪主が知人を通じて三人を選択して掘ってもらうことになっている。この三人に對して酒一升、ツマミを出し、一人が掘る時は二人が飲食するという一働二休式で掘られる。

② 穴掘りを擔當した人は、アゲ・デンマイ・握り飯・酒一本で飲食する。

③ 夜墓地で飲食しながら火を燃やし、盆踊りの歌をうたい乍ら夜とぎをする。

①7 穴掘りを擔當した人のみが飲食する。

②5 墓穴を掘った人のみ少量飲酒す。

②7 焼く人が冷酒を飲む。

21 「火葬の場合、その遺骨の處置・灰の處置」

③ 日没後親族關係者で火をつけ、翌朝八時頃骨を迎えに行く。

④ 火葬の翌日親族によつて骨を拾いに行く。

⑦ 残った骨及び灰はカマスに入れ、河原（自村の土器川）に流す。

22 「埋葬した上への作りものについて」

① 埋葬した上に花をさし（白・金・銀・四花等）又塔婆三枚をさす。又土盛りの上に石を置くこともある。

③ 標目・イガキ・オデン。

⑥ 墓標をたて花を供え、周りを竹で一米四方に圍む。

⑩ ハタに使用した竹を曲げて埋葬した上に突きさし、その上からタワラをかぶせることもある。

⑮ “先ダイマツ”と云つて長さ三十糎餘の割つた竹を突きさす。

⑰ 墓の上にカマを立てる風習がある。

⑲ 埋葬した上へは墓標をたて、竹垣でとりまき、供華・燈明などをあげ、翌朝墓直しをして死者の法名を三度呼ぶ。

⑲5 墓標を圍むように竹で垣を作つて四角に圍む。

③1 墓標・膳・四方に幡を立ててナワで囲む。小幡を寺で用意し全部の墓に立てる。

23 「野歸り、墓より歸宅してからの作法、飲食について」

① 墓に供えたものを“ホゲル”と云うが、供えたものは絶対に家に持ち込んではいならない。歸りの場合、墓より出て喪家にあまり近くない所でゾーリをぬぎ素足で歸ることになっている。本來は墓地を出るとすぐ素足になつた様である。家に入る前に木炭で手をこすり、更に鹽で手を洗い、口をうがいて入るのである。續いて“三十五日の法事”と云われるものが僧侶によつて行われる。その間に親族は水を供える。後、精進料理で會食する。

⑦ 歸宅後、ガンモドキ・アゲ・アラメ・フを用いた精進料理で會食する。

⑨ 同じ道を通つて歸ることを嫌う。歸宅後戸口で食鹽をなめ、そして足の先で“ミ”に少しさわる。

⑩ “ミ”に鹽を入れてまつる。

⑬ 歸りはワラゾーリの緒を切つて素足で歸る。家に入る時は一人一人鹽をふりかけてもらつてから入る。

⑮ 鹽を手につけて水で洗う。飲食の場合は無常講が給仕する。

⑯ “仕上げ”と云つて、手傳人・親族等が飲食する。

⑰ 野歸りの際は入口にて鹽をふりかけ手足を洗い清める。讀經後一同飲食する。

⑱ 家の前に鹽をまき、歸つて來るとそれを踏んでから入る。

⑳ 玄關前で鹽をふりかける。

24 「願もどしの作法について」

① ある様であるが具體的なことは不明。

25 「死人を船にのせて送り出したという傳承はないか」

① 過去において青森縣西津輕郡木造町大字出來島で行われていたらしいが現在は全くない。

26 「昔は一定の墓を作らず洞穴の中などに死人を放り込んでいたという云い傳えはないか」
なし

27 「墓は一ヶ所だけか（兩墓制の場合は兩墓の位置）」

① 埋葬地と屋敷墓の二ヶ所ある。

①7 死體を埋葬する場所と、檀那寺の境内に石碑を立てて墓として祠る。

②8 埋葬墓地は墓標をたてるが、數年後他の死者を埋葬する故、寺院境内に代々の石碑がある所に初七日より永年合詞する。

③8 二ヶ所あり、寺の境内と近郊の一ヶ所（共同墓地）。

④4 埋葬する所は隣村の墓地で、石碑は寺にたてる。

28 「僧侶の役目、權限」

① 僧の役目は引導のみで權限はない。

①0 僧侶は儀式を喪家の都合通りに行うだけである。

①7 葬式を執行する役目、法名の付與・過去帳への記入・引導等である。

②2 僧侶は儀式を行うのみで、執行・時間等については全て世話人が決定する。

③② 枕經・法名の付與・引導等の役目あり。

③③ 引導或は納骨回向のみで、葬式の執行について権限としてはないが相談役になる。

○死後の供養

29 「忌明けの時期とその行事内容」

① 三十五日もあるが普通四十九日が多く、この時は僧侶の讀經のあと會食あり。この地方では中陰以外の法事を「ジセコ」と云つてをり、その由來は不明であるが普通の年回だけに云う言葉である。

③ 三十五日や四十九日には親族や手傳者を招待する。

⑤ 忌明けは四十九日。

⑥ 男は五十日、女子は三十日で忌明けである。

⑭ 男子は死去より四十九日、女子は三十五日で忌明けである。

⑰ 四十九日を忌明けとする。

②⑤ 四十九日には「カサノモチ」と云つて小さい餅を一升で四十九個作り、その上にうすくのぼした丸い形の大きな餅をかぶせたものを作る。

30 「中陰中の行事内容（講……念佛講・觀音講などに注意）」

① 特に取り上げるものはない。念佛講・觀音講があるが、通夜・出棺時に念佛を唱和するのみで中陰中は僧の讀經が中心となる。

③ 親族及び近隣者によつて念佛及び詠歌をとなえる。

- ④ 七日毎に檀那寺の僧による中陰回向があるのみで、家族だけが詣る。
- ⑥ 尼講の講員が死んだ時は、月の十七日、二十四日のいずれかの日に“別れの念佛”を行う。
- ⑬ 中陰中一度観音講による詠歌がある。
- ⑯ 百萬遍念珠を繰り御詠歌をとなえる。
- ⑰ 和讃講があるが通夜の時に詠唱する。中陰中初七日から七七日迄寺に塔婆・供養物を持って参り、本堂にて回向する。
- ⑲ 三七日に念佛講が参る。
- ⑳ 念佛講があり初七日の日に参る。
- ㉕ 観音講が参加する。
- ㉖ 寺の住職と念佛講は初・三・五・七七日に参る。
- 31 “佛おろし”ということが行われているか。(特に葬儀の日に近接するものに注意)
- ① “佛の口おろし” “イタコの口おろし”と云い、青森縣下では非常に行われたものであるが現在はいくなくなっている。葬儀に近接しているものはない様である。“佛おろし”は佛への追善供養の爲と云われている。
- 32 「最終年回について(石塔と位牌に注意)」
- ① 年回は一・三・七・十三・十七・二十三・二十七・三十三・三十七・五十回忌の十回で最終年忌は五十回忌であり、この時に“角塔婆”をたてる。(五寸角十二尺、頭部五輪)
- ③ 忌明けと同時に位牌を作る。

④ 最終年忌は五十回忌。位牌は満中陰までに作り、石塔は一周忌までに作る。

⑬ 五十回忌が最終年忌。

⑭ 最終年忌は五十回忌。この時“花シバ（シキビ）”の木を塔婆として、これに戒名を書いて墓の後にたてる。

⑮ 五十回忌が最終年忌。四十九日から百ヶ日又は一周忌に白木の位牌から塗の位牌にかえる。

33 「年内に不幸があつた家の迎年準備と正月の行事について」

① 普通の迎年準備はしない。例えば、しめなわ・ヨジレ葉・鏡餅・神像の軸をかけて神様を遊ばせるということはない。

② 歳の瀬の夕食後、僧侶が“お寂しいお歳取り”の法要を行い、近親者・近所の人々が“お寂しいお歳取り”の挨拶に行く。正月の準備はしない。

⑩ 四十九日が済んでいれば普通に済んでいなければ二月入りにする。又海岸の村で不幸のあつた家は“カケ”の魚を掛ける木を取りかえる。

⑪ 正月の時に“身グヤミ”がある。

⑫ 四十九日までの家は正月の行事は全くしない。

34 「死者の魂の行方、死後に生まれ替るといふ云い傳えがあるか。」

① 死者の魂の行方について死後七日目に“三途の川”を渡ると云う。まず三途の川の所で、川邊の樹の下にいる奪衣婆に白装束を取られ、婆はその着物を樹に投げあげてその樹の枝の垂れ方によつて罪の輕重を判定すると云い、それによつて六文錢を拂つて三途の川を渡るが、川の流れに急・緩急・緩の三つの流れがあり、罪の

輕重によつてその何れかに落ちる。落ちればそれぞれの地獄へ行くとされ、無事橋を渡れた者は極樂に行くものと云われている。

○其他

35 「村内の寺院・庵・堂・塚・共同墓地を地圖に記入」 省略

36 「村内の無縁墓・萬靈塔・地藏・五輪石などを地圖に記入」 省略

37 「村内又は近隣の八十八ヶ所・三十三ヶ所・二十五靈場などあればその所在、又巡禮の札納めについて」 省略

38 「村内に特に太子・行基・空也などの高僧・民間僧の傳承があるか」

① 淨土宗金光上人の傳承あり。上人開創の寺として南津輕郡藤崎町に攝取院があり、又西津輕郡柏村淨圓寺に「立像」があると云う。

④ 日蓮上人の辻說法跡と云われる所がある。

⑦ 西高篠村に法然堂（法然上人御分骨所）、熊谷堂がある。

⑧ 空也上人堂あり。上人堂と呼ばれてをり上人の建立されたものであると云い傳えられている。その字を“寺中”と呼んでいる。尚その起源が空也上人の念佛踊からなると云われる“三申踊”（福岡縣無形文化財）が毎年盆踊りとして盛大に行われている。

⑩ “三人組”という山があるが、これは三人の民間僧が死んだ場所と云われている。

⑬ 徳本上人が行脚にこれこれの寺に逗留されたと云う。

⑭ 辨榮聖人が居住され念佛を弘めた地である。

③4 聖徳太子が法隆寺から橘寺へ通われる途中必ずこの村のお宮で馬をとめ休憩されたと云う傳承がある。休憩の場所は現在權現堂と呼ばれる地にある。

③6 村内に行基の開基と傳える寺がある。

39 「妻や養子を實家の墓に葬る例はないか。又夫婦が檀那寺を異にする風はないか」
なし。

40 「幼児・未婚者・子のない離婚者・子孫のないもの・親族以外の同居者などの靈の祠り方」
別になし。

41 「變死者の靈・産死者の靈の祠り方・流れ佛の扱い方・無縁の者の墓・家畜の墓について」

⑦ 變死者に對しては流れ灌頂を勤める。

⑩ 産死者の場合は千枚佛を流す。

42 「宗旨による葬式・葬制の差異があるか」
なし。

以上

(附記) 報告中の特殊な用語、方言など色々不明な點について一々説明・解説を加えるべきであろうが、調査報告、中間發表の爲筆者の注・解説を殆んど加えずここに掲載したことを諒承せられたい。